

## 研究ノート

## 羽鳥卓也教授のアダム・スミス研究\*

京都学園大学 経済学部

渡辺 恵一

## 1. はじめに

戦後わが国の古典派経済学研究において斬新な問題提起をされてきた羽鳥卓也教授が亡くなられたのは、2012年12月17日(享年91歳)のことであった。羽鳥教授は、『リカード研究——価値と分配の理論』(未来社 [1982])や『リカードの理論圏』(世界書院 [1995])等の著作によって、一般にリカード研究の碩学として知られている。しかし羽鳥教授は、1990年にスミスを主題とする『『国富論』研究』(未来社)を出版され、その後もリカード研究およびマルサス研究と雁行しつつ、スミスの政策論・地代論・租税論にかんする諸論考を次々と発表された。終生のライバルであった小林昇の表現を借りるとすれば、羽鳥教授の研究領域は、イギリス古典派経済学の「デルタ」——すなわち、スミスを始点とし、リカードとマルサスを底辺として形成される「デルタ」の徹底した深耕にあったと言ってもよいのではなかろうか。「マルサスにおける資本蓄積と恐慌」(【B】第5章所収)を始めとして、マルサスを単独に扱ったモノグラフもかなりの数にのぼるが、しかし、羽鳥教授の「デルタ」の中心ラインはスミス→リカードの批判的継承関係の理論的解明におかれていた。

そこで本論では、そのなかでもとくに労働価値論(いわゆる投下労働価値説)にかんするスミス→リカードの継承関係に焦点を合わせて、スミス研究における羽鳥教授の業績の一端を明らかにしたい。

---

\* 本研究は、2013年7月13日に甲南大学で開催された経済学史学会関西部会第164回例会・第2プログラム「羽鳥卓也先生追悼シンポジウム」(「古典派経済学研究の課題——羽鳥卓也先生の問題提起を再考する」)の報告原稿を加筆修正したものである。当日の司会は新村聡(岡山大学)と中澤信彦(関西大学)両会員で、第1報告・藤本建夫会員(甲南大学)「羽鳥卓也先生の業績と人柄」、第2報告・渡辺恵一「羽鳥卓也先生のスミス研究」、第3報告・佐藤滋正会員(尾道大学名誉教授)「羽鳥卓也先生のリカード研究」、第4報告・八木紀一郎会員(摂南大学)「羽鳥卓也先生のマルサス研究」が、その報告内容であった。なお、同年12月25日に明治大学で開催されたリカード研究会(第28回)でも、司会の服部正治氏(立教大学)による「羽鳥卓也先生の研究史」をはじめとして、新村聡、千賀重義(横浜市立大学名誉教授)、渡会勝義(早稲田大学)の諸氏による、同上シンポジウムと同じテーマの追悼報告がなされた。

## 2. 『国富論』における労働価値論の所在

スミス研究にとどまらず、これはリカードウ研究とマルサス研究にも共通するところではあるが、羽鳥教授のテキスト読解の特徴を、一言で表現するとすれば、「眼光、紙背に徹す」ということになるだろう。一言一句も見逃がさない、鋭くて透徹したテキスト読解が、羽鳥教授の学史研究の魅力であり、その特徴でもある。だが、もう一点指摘しておかなければならないのは、羽鳥教授のスミス研究が内田義彦の『経済学の生誕』（1953 [増補版 1963]）における研究方法の継承と、とりわけ同著後編の理論的課題のさらなる発展を目指したものである（羽鳥【D】240—42頁）。「重商主義解体期」（タッカーとスミス）をめぐる内田・小林論争<sup>†</sup>は有名であるが、「重商主義」およびその「解体期」にかんする羽鳥先生の業績（【A】[1958] [1964]）は、内田側からの代理論争の感があり、それゆえ、小林の羽鳥教授への反論 [1958] は熾烈きわまるものとならざるをえなかった。星野 [2001] によれば、この内田・小林論争は、重商主義研究の枠内にとどまらず、スミス研究の理論レベルにも拡大しているとされる。というのは、内田＝羽鳥が『国富論』体系は、スミス固有の投下労働価値論＝付加価値論の見方で一貫していた」と理解するのに対して、小林は、マルクス以来の通説を踏襲しつつ、「スミスの商業的社会とそこにおける労働価値論は、資本制社会においては解体＝放棄された」と解釈するからである（星野 [2001] 28頁）。

しかし羽鳥教授は、もちろん『生誕』後編の理論分析をただ無批判的に継承しようとされたのではない。内田・小林が正しいものと前提していたマルクスのスミス解釈そのものの問題点を剔出することによって、羽鳥教授は、わが国のスミス価値論研究をまったく新しい段階へと引き上げた。スミスは支配労働＝価値尺度説と併存したかたちで、投下労働価値説を堅持しようとしたという「一貫」説の立場を、羽鳥教授ほど説得的に論じた研究者は内外を通じて過去にはいなかったからである。ここでは羽鳥【D】のスミス解釈のポイントとなる論点を紹介しておきたい。

### 2-1. 資本制社会としての「商業社会」

『国富論』第一篇第4章や労働価値論が主題となる同第5章では「商業社会」が分析の対象となっている。この商業社会は、一般に理解されているような小商品生産者からなる「単純商品生産社会」ではなく、羽鳥教授によれば、「生きた労働」が商品として市場に登場する「資本主義的商品生産社会」である（56頁）。つまりスミスは、『国富論』第5章では支配しうる「生きた労働」が市場に存在する商業社会すなわち事実上の資本制社会を、労働価値論を論じるための舞台として設定しているというのである。内田は、スミス経済学の歴史的基盤として「小商品生産者」の両極分解を念頭においているが、羽鳥教授のばあい、スミスの価値論分析では、「小商品生産者」的要素は理論的に捨象されていると考えられている。

<sup>†</sup> なお内田・小林論争については、渡辺 [2013] を参照されたい。

## 2—2. 支配労働＝価値尺度説と投下労働＝価値源泉説および価値規定説

『国富論』〔第一篇〕第5章は、むしろ、支配労働＝価値尺度説を定立することに、その主題をおいていたけれども、その論述のなかで、スミスは投下労働＝価値源泉説とともに投下労働＝価値規定説をも提出していたのである。(73頁)——『国富論』第5章の主題は、「支配労働＝価値尺度説」である。この点について大方のスミス研究者の間に意見の対立は存在しない。問題は、商品(A)の交換価値を測る価値尺度としての「支配労働」とは何かである。この問題にかんするわが国の通説的解釈は、次のマルクスの論評(『剰余価値学説史』)を踏襲するものである。「ある人の所持する商品の交換価値は、分業以降は、彼が買うことのできる他人の商品のうちに存する、言い換えれば、それに含まれている他人の労働の量、つまり実現された他人の労働の量のうちに存する。そして、この他人の労働の量は、彼自身の商品に含まれている労働の量に等しい」(Marx [1861-63],II, S.369, ⑤ 61頁)。

つまり、通説的解釈によれば、スミスのいう価値尺度とは、ある商品(A)が支配しうる他の商品(B)に「投下された」労働量であり、そしてその商品(A)の支配労働量は、その商品自身に「投下された」労働量に等しいとされる。羽鳥説の第1のポイントは、スミスのいう「支配労働」とは、商品(B)に「投下された」労働ではなく、商品(B)に投下される「生きた」労働のことであるとして、マルクスのスミス解釈およびそれを継承してきた通説的見解を批判することである。

さらに羽鳥説の第2のポイントは、投下労働説を「価値源泉」と「価値規定」の二つの理論に区分することにある。すなわち『国富論』第5章の冒頭2文節において、「投下労働＝価値源泉説」は、労働＝「労苦」というかたちで支配労働＝価値尺度説とともに提示されているのだが、価値の大きさを決定する「投下労働＝価値規定説」は、同第7文節において、すなわち「それらの金属を運ぶのにより少ない労働しかかからなかったから、それらが市場に運ばれたとき、より少ない労働しか購買または支配しえなかった」という議論において、はじめて登場するとされる(67頁)。

## 2—3. 資本制社会における投下労働説の修正問題

スミスは、『国富論』第6章において、いわゆる「初期未開の社会」における投下労働価値説の妥当性を議論したのち、一転、資本制社会になると「ある商品の獲得または生産に使用される労働量は、商品が通常購買、支配、交換すべき労働量を規定しうる唯一の事情ではなくなる」と論じた。通説的解釈は、この文章を、資本制社会分析におけるスミスの投下労働説の放棄宣言と受けとるのだが、羽鳥説は、「唯一の事情ではなくなる」という文言に着目して、それを投下労働説の全面否定と解釈してきた通説を批判する。その論拠とされるのは、次の2点である。第1に、「資本制社会における商品の支配労働量と投下量労働量との不一致という事実についての指摘は、利潤の源泉を賃金労働者の実行する労働が産出する価値のうちに求める見解〔投下労働＝価値源泉説〕と不可分の結びつきをもつ」こと(83頁)。第2に、スミスは、投下労働＝価値規定説の観点からみても、労働価値説を全面的に放棄したと

みることはできない。なぜなら、「資本制商品の価値の騰落は、その生産に投下される労働量の増減と「価格の構成部分」の変動のいかんによって規定されるというのが、スミスの見解であったように思われる」(100頁)からである。

#### 2-4. 『国富論』第二版の改定問題

『国富論』初版・第6章では、「三箇所に、賃金・利潤・地代こそが「価値の源泉」をなすという趣旨の文言が書かれていたのに、第二版では、これらのうちの二箇所が改訂されて、「価値の源泉」の語句が「価格の構成部分」と書き改められたのであった。このような改訂という事実は、賃金・利潤・地代を「価値の源泉」とみなすべきと書かれていた『国富論』初版時のスミスの見解が第二版で撤回・改変されたということの意味する(94頁)。そして残された「一箇所」だけは、「後続諸版の改訂のさいのスミスの不注意のための見落としに起因すると考えてよいだろう」(96頁)。——『国富論』初版から第二版への改訂において、所得範疇を「価値の源泉」とする記述が「価格の構成部分」へと書き替えられたことは、スミスが投下労働価値説を堅持していたことを示す、有力な補強材料となるだろう。

#### 2-5. 「農業投資の有利性」命題とスミスにおける投下労働説の破綻

スミスの価値論は、支配労働価値説と投下労働価値説の併存を一貫した特徴とするものであったが、『国富論』第二篇第5章のいわゆる「農業投資の有利性」命題においてスミスは、投下労働説の立場を結局のところ放棄することになる。なぜなら、「家畜もまた生産的労働者であり、そのうえ農業では自然もまた労働する」という主張は、スミスが一貫して論じてきた「投下労働＝価値源泉説」および「投下労働＝価値規定説」と矛盾するからである。この地代問題をめぐる「農業投資の有利性」命題の理論的解決については、スミス以降のマルサス＝リカードウ段階には引き継がれることになる。

この農業投資の有利性にかんする羽鳥教授の見解(破綻説)は、とくに目新しいものではないが、重要なのは、『国富論』の「不注意な読者」に向けられた次の指摘である。農業投資の有利性命題では「農工両部門に投下される等額の資本が活動させる生産的労働の量には差異があると書かれていて、不注意な読者には両部門の資本の有機的構成の差異が指摘されているようにみえるかもしれないけれども、文末に近い箇所には、両部門で雇用される等量の生産的労働が異なる価値を生産するという趣旨のことが書かれているから、両部門では等額の資本によって同数の賃金労働者が雇用される、とスミスが考えていたことを示している。」

(181頁〔傍点強調は著者自身]) —— 「等額の資本で・・・」から始まる「農業投資の有利性」を論じた文節の後段に注目するこのテキスト読解は、スミスの主張に内在する理論的矛盾を、「資本の有機的構成」概念(マルクス)の機械的適用によって解決可能と考える「不注意な読者」(私もまたそうであった)に対する鋭い警句である。

### 3. スミス経済学（価値論）研究の再生のために

スミスの価値論については、今日では文献目録を作成することさえ困難なほどの研究の蓄積があり、しかもその数はさらに増加の一途をたどっている。しかし、スミスの経済学理論、とくにスミスの価値論について論及するわが国の研究者であれば、まずは羽鳥教授の『『国富論』研究』を出発点にしなければならない。これまで『国富論』第一篇第5章の冒頭二文節（あるいは第三版で追加された第三文節を加えた三文節）が価値論研究の議論の焦点となってきたが（渡辺 [2010]）、今日では一方において、羽鳥説をさらに推し進めて、『国富論』全体を「付加価値」論としての投下労働説の体系として捉える星野 [2002] [2010] の挑戦的研究があるかと思えば、その対極には、時代も様変わりしたのか、「労働価値論説は、『国富論』のどこを探しても絶対にできません。スミスは労働価値説を主張するような人ではありませんでした」とまで断言する啓蒙書（丸山 [2011] 79 頁）が、権威のある出版社から公刊される有様である。この書物は、全体としてバランスのとれたスミス研究入門書であり、価値論については小林昇『国富論体系の成立』（未来社 [1973]）と「労働価値学説史の第一人者である遊部久蔵」の『労働価値論史研究』（世界書院 [1964]）が脚注で言及されている（同 241—42 頁）。なるほど「遊部のこの著作は今日もなお、価値論研究にあたっては逸することのできない重要な労作である」（同 242 頁）ことは確かにその通りではあるが、それならばなおさら、遊部のもとで学ばれた羽鳥教授の著作『『国富論』研究』に言及しないのは疑問である。また、小林の『国富論体系の成立』が優れた作品であることは間違いないが、それ以後 40 年近い内外の研究について一切触れることなく、『国富論』における労働価値論の不在を断定してしまうのは、逆に一般の読者にも広く読まれる啓蒙書だからこそ、問題があるのではなからうか。『国富論』の「不注意な読者」に対する羽鳥教授の警句に、われわれは耳を傾けなければならないであろう。

### 4. むすびにかえて

私は、1989 年に出版された久保芳和・真実一男・入江奨編著『スミス、リカードウ、マルサス——その全体像理解のために』（創元社）に『『国富論』における政治と経済』という一文を寄せたことがある。「スミスの政治思想における地主階級への好意的評価と〔産業〕資本家階級への否定的評価という観点を念頭において、『国富論』における政治（統治）と経済（商業）の関係を再検討すること」を課題とした拙稿に対して、羽鳥教授からは、同書の書評 [1990] において懇切丁寧なコメントと鋭い批判を寄せていただいた。「渡辺論文の概要を紹介したが、評者にはなかなか面白かった。しかし、あまりに大胆な立論であるため、疑問の箇所も少なくなかった。いまは一点だけ取り上げる」（62 頁）として、羽鳥教授は、スミスが批判したのは排他的独占権を与えられている大資本家であって、それから排除された中小資本家は「社会の一般的利益」と敵対する社会層ではない、と指摘された。

拙稿は、海外留学直前の慌ただしい時期に脱稿され、校正作業も海外郵便で 1 回のみという制約もあり、その出来栄えについては汗顔の至りであるが、しかし羽鳥教授の書評に接し

た帰国後の衝撃は今でも忘れることはできない思い出として残っている。古典派経済学研究の第一人者から「なかなか面白かった」と言っていただけたことは嬉しく自信にもつながったが、寄せられた批判にどのように回答したらよいのか考えのまとまらない複雑な心境であった。留学先大学の書店で偶然目にした McNally [1988] やスコットランド啓蒙思想研究、さらには最新の歴史研究の成果をも取り入れてまとめた拙稿『『国富論』における地主ジェントリ論——重商主義批判の社会的基盤について』[1992] で、私としては不十分ながらようやく回答の責務を果たせたのではないかと考えている。

### 羽鳥卓也 (1922. 9. 23—2012. 12. 17) : スミス関連の文献リスト

#### (1) 著書

- 【A】 [1957] 『市民革命思想の展開——古典経済学成立史序説』御茶の水書房(増補版[1976])
- 【B】 [1963] 『古典派資本蓄積論の研究』未来社
- 【C】 [1972] 『古典派経済学の基本問題』未来社
- 【D】 [1990] 『『国富論』研究』未来社

#### (2) 論文等

- [1958] 「スミスの賃銀論および人口論争について——小林・水田両教授の批判に接して」『商学論集』〔福島大学〕27(2), 129-150
- [1961] 「スミスにおける資本蓄積と所得分配」『商学論集』30(1), 86-135 頁【B】
- [1964] 「アダム・スミスと重商主義」『商学論集』33(1), 1-53 頁【C】
- [1970] 「スミス蓄積論と重農主義的観念」『岡山大学経済学会雑誌』2(1), 1-40 頁【C】
- [1972] 「アダム・スミスの蓄積と再生産の理論」(大河内一男編『国富論研究』Ⅱ、筑摩書房)【D】
- [1974a] 「スミスにおける『価値の源泉』——『国富論』第二版の改訂箇所について」『三田学会雑誌』67(6), 26-42 頁【D】
- [1974b] 「スミスの価値論と『初期未開の状態』」『三田学会雑誌』67(10), 31-48 頁【D】
- [1976a] 「いわゆる『国富論草稿』について」『三田学会雑誌』69(6), 402-419 頁【D】
- [1976b] 「『国富論』における生産的労働と蓄積ファンド」(経済学史学会編『国富論の成立』、岩波書店)【D】
- [1981] 「小林昇教授と『国富論』研究——「小林昇経済学史著作集」をめぐって」『岡山大学経済学会雑誌』13(3), 469-492 頁
- [1990] (書評)「久保芳和・真実一男・入江奨編著『スミス・リカードウ・マルサス』」『経済学論究』〔関西学院大学〕44(1), 59-70 頁
- [1991] 「アダム・スミスと輸出奨励金」『三田学会雑誌』(アダム・スミス没後 200 年<特集>) 83(4), 801-821 頁
- [1992] 「A.スミスと北アメリカのイギリス領植民地」『経済系』〔関東学院大学〕172, 20-35 頁

- [1994] 「A.スミスにおける相殺関税と戻税」『熊本学園大学経済論集』1(1/2), 1-17 頁
- [1995] 「ブキャナンのスミス地代論評注」『熊本学園大学経済論集』2(1), 15-30 頁
- [1996] 「A.スミスにおける地代と原生産物需要」『熊本学園大学経済論集』3(1/2), 15-33 頁
- [2002] 「A.スミス課税論の若干の局面」『経済系』213, 108-129 頁
- [2008] 「A.スミスの資本用途論——星野彰男の『国富論』研究を検討して」『経済系』235, 64-77 頁
- [2011] 「『国富論』における小林さんの視角」(服部正治・竹本洋編『回想小林昇』日本経済評論社)

## 参考文献

- Marx, K. [1861-63], *Zur kritik der Politischen Ökonomie* (Manuskript 1861-1863), MEGA, 2. Abteilung, Bd. 3, Teil 1-6, Deitz Verlag, 1976-1984. (資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集』④=⑨, 大月書店, 1978-1984)
- McNally, D. [1988], *Political Economy and the Rise of Capitalism: A Reinterpretation*, University of California Press.
- 小林昇 [1958] 「重商主義解体期における貨幣・貿易理論」『立教経済学研究』12-1 (同『小林昇経済学史著作集IX——経済学史評論』未来社 [1979] に大幅に「増補」されて収録)
- 野沢敏治 [1991] 「『国富論』の性格と構造をめぐって——羽鳥卓也『『国富論』研究』(未来社, 1990年)」『千葉大学経済研究』6-1
- 星野彰男 [1988] 「羽鳥教授のアダム・スミス研究をめぐって」『経済系』155 (同『市場社会の体系——ヒュームとスミス』新評論 [1994])
- [2001] 「アダム・スミス研究の現状と将来」『経済学史学会年報』39
- [2002] 『アダム・スミスの経済思想——付加価値論と「見えざる手」』(関東学院大学出版会)
- [2010] 『アダム・スミスの経済理論』(関東学院大学出版会)
- 丸山徹 [2011] 『アダム・スミス『国富論』を読む』(岩波書店)
- 水田健 [1991] 「『国富論』研究」羽鳥卓也『『経済系』166
- 渡辺恵一 [1989] 「『国富論』における政治と経済」(久保芳和・真実一男・入江奨編著『スミス、リカードウ、マルサス——その全体像理解のために』創元社)
- [1992] 「『国富論』における地主ジェントリ論——重商主義批判の社会的基盤について」『京都学園大学経済学部論集』2-2
- [2010] 「スミス労働価値論の再読——商品価値の認識と実在」『大阪経大論集』61-1
- [2011] 「アダム・スミス研究の動向——過去10年における内外の『国富論』研究を中心に」『経済学史研究』53(1)
- [2013] 「内田・小林論争とアダム・スミス研究」『経済学論究』[関西学院大学] 67-2